

國學院大學學術情報リポジトリ

韓国と日本の鉄鐸に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高, 慶秀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001969

韓国と日本の鉄鐸に関する一考察

高 慶 秀

要旨

本稿では、韓国と日本における鉄鐸に関する研究傾向を概観し、今後の方向性と課題について考えてみた。韓国における鉄鐸に関しては、4～5世紀代の墳墓から出土する事例の空白を埋める作業が今後の課題として残されているが、5世紀代の竪穴式石槨墓である蔚山・早日里古墳49-2号からは、金銅冠2式と共に3点の鉄鐸が検出されており、この時期の冠の所持者は政治的な首長であると同時に儀礼遂行者としての一面も持っていたと思われる。韓国の鉄鐸が墳墓出土のものが多いの 비해、日本における資料の出土地は、古墳、祭祀遺跡、集落など、多様であるが、5世紀代に出現し、7世紀に至るまで古墳時代の全期を通じてみられるようである。従来の研究で、鉄鐸の副葬の背景について渡来系の鍛冶工人と関連性を想定している見解が多いが、鉄鐸の確実な最古の例は、5世紀後半の岡山県西吉田北1号墳出土の2点で、主要な副葬品となっている鍛冶具は鉄鐸も共に韓半島からの搬入品としての可能性が考えられている。韓半島における鉄製儀器によって設定される地域圏は、鉄及び鉄器生産とほぼ一致するが、日本における鉄鐸、小型鉄製農工具などの鉄製儀器に関しても、鉄器生産を巡る韓半島と交流関係を念頭におきながら、日本列島内でどのような歴史的・地域的な展開を遂げたかを考えていかなければならないであろう。

キーワード

蔚山・早日里古墳49-2号、西吉田北1号墳、渡来系鍛冶工人、鉄製儀器、鉄器生産

1. はじめに

「鐸」は、中国の古代文献には「鈴」として知られている。銅鐸として最も早い時期のものは、中国で二里头遺跡⁽¹⁾ (B.C.1800～B.C.1500頃)から出土した青銅器時代の事例がある。また多少遅い時期の殷と西周時代には、馬の装飾である馬鈴として使用されたこともあった。

鉄製の鐸（以下鉄鐸とする）に関しては様々な解釈があるが、韓国の鉄鐸が墳墓出土のものが多いの 비해、日本における資料の出土地は、古墳、祭祀遺跡、集落など、多様である。また考古遺物の他にも、シベリアのテュバゴの巫女服に付いている事例⁽²⁾と、日本の長野県諏訪大社上社、同塩尻市の小野神社、同上伊那郡辰野町の矢彦神社等⁽³⁾で宝物として伝来されている例など、宗教民俗学の資料が存在する。

ところで、音を発する道具として、鉄鐸が祭祀具であるとする認識はほぼ共通しているようであるが、その一般的な形態は、鉄板を巻いて円錐形または円筒形を作り、頂部に懸垂孔を設け、その中に舌と呼ばれる細長い棒をヒモ、針金などで吊り下げて音が

出るようにしたものである。また舌のない複数の場合は、鐸身がお互いぶつかり合って音を出していたと考えられている。

^{たまたま} 湛 神事は諏訪上社に伝わる鉄鐸を用いての神事であるが、このような、今日まで残る宗教民俗学の実例は、古代において鉄鐸がどのような人々によって、どのような祭祀の場面で使われたかを推測する際に大いに参考となるであろう。

本稿では、韓国と日本における鉄鐸に関する研究傾向を概観し、今後の方向性と課題について考えてみたい。

2. 韓国の鉄鐸に関する研究傾向

鉄鐸は韓半島の初期鉄器時代（三韓時代）と三国時代前期にかけて作られ始めて、三国時代の6世紀以降の墳墓から多く出土する。

その用途については、当初、異形鉄器か不明鉄器などで報告されるなど、全く認識されておらず、研究が進んでいない状況であったが、1987年の陝川芋浦E地区5-1号の報告で鉄鐸と命名されはじめ⁽⁴⁾、1990年代以後、その報告例が増加するにつれて、基

礎的な検討が必要とされるようになった。

鉄鐸の詳しい事例説明は、ここでは省略するが、鐸身の形態は大きく円筒形と円錐形があつて、特に時期による形態の変化はみられない。舌は上端を鉤形に加工したものが多く、断面は円形、方形、長方形など、多様である。舌の鉤形の部分にヒモや針金などを掛けて鐸身の頂部の懸垂孔に通す方法で取り付けていたようであるが、陝川・倉里古墳 B-26 号墳では針金が残された状態でみつかった。

型式分類については、洪潛植氏や金東淑氏が整理したように、鍛造製と鑄造製に大別され、頂部の有無とその形態によって細分できるが、時期的な型式の変遷より、地域ごとに多様な型式の分布が見られることから、各地域における在地生産の可能性が考えられる。

鉄鐸所持者に関する解釈は、朴淳發氏が⁽⁵⁾ 出土遺物からみた被葬者の多様な性格に触れ、豪民層または土豪層、宗教的な権威者、そして鍛冶具を共伴する場合は、鉄生産の匠人集団であつたと推定している。

洪潛植氏は⁽⁶⁾、小型墳における鉄鐸の副葬を、銚帯金具のような身分の象徴的な遺物と共伴していないという点をあげて、巫俗人の社会的地位の低下と関連させて理解した。

金在浩氏は⁽⁷⁾、6 世紀中葉以降、各地に出現する退化形式の樹枝形帯冠が鉄鐸と共伴する様相を指摘しながら、これらの所持者は村落内の最高級有力者ではなく、信仰的な権威を持つ宗教的指導者として理解している。

金東淑氏は⁽⁸⁾、嶺南地方の古墳出土の事例を集成し、型式、年代、副葬位置、分布などを詳細に考察した後、6～7 世紀代に副葬が急増する背景と鉄鐸所持者の性格について論じたが、専門巫俗人である可能性が高いという観点でアプローチしている。この論文は、鉄鐸に関する基礎的な検討からその所持者についての性格の解明を試みた精力的な研究として評価される。

しかし、金東淑氏も指摘しているように、嶺南地方での鉄鐸の起源は、慶山林堂 AI-141 号木棺墓から出土した資料を通じてみた場合、三韓時代まで遡る可能性がある。また 4～5 世紀代の墳墓から出土する鉄鐸の事例の空白を埋める作業も今後の課題と

して残されている。

今回金東淑氏のご教示を得て、5 世紀代の竪穴式石槨墓である金海・花亭遺跡 71 号、蔚山・早日里古墳 49-2 号について調べることができたが、特に蔚山・早日里古墳 49-2 号からは⁽⁹⁾、金銅冠 2 式と銀製耳飾、金銅銚帯片、金銅鉸具、金銅三葉文裝飾大刀 2 点と共に 3 点の鉄鐸が検出されており、注目される。鉄鐸は石槨屍床部の東長壁の付近で、大刀と共に 3 点鐸身と舌が分離された状態でみつかったが、部分的に木質と布の痕跡が付着している（図 1）。

新羅は有力な在地勢力に対して、臣属する見返りとして、部分的な支配権を承認していた。在地の勢力は、新羅という強力な背後勢力に依存しながら支配権を保証してもらい、権力を行使していたのである。金銅製の冠、三葉環頭大刀、金銅銚帯片などの豪華な副葬品は、その時代的な背景を物語っている。

また 3 点の鉄鐸が共伴していることから、5 世紀代の冠の所持者は政治的な首長であると同時に儀礼遂行者としての一面も持っていたことがわかる。

最後に、韓国の鉄鐸資料の中には、墳墓の他に祭祀遺跡、生活遺跡から出土した事例もある。韓国の代表的な祭祀遺跡である扶安竹幕洞祭祀遺跡⁽¹⁰⁾から鉄鐸 2 点が出ており、また三国時代の生活遺跡である大邱時至 4G-3 号の住居跡⁽¹¹⁾の出土の例がある。

今後、このような遺跡における資料の整理に伴って、その事例は増えて来ると思うが、墳墓出土のものとの比較検討も必要であろう。

3. 日本における研究傾向と事例

日本における鉄鐸の存在は、『古語拾遺』、天石屋戸段に「令天目一箇神作雜刀・斧及鉄鐸。（古語、佐那伎）」とあり、鉄鐸を古くは「御宝鈴」「大鈴」「御宝」あるいは「佐奈伎鈴」と呼んでいた。天目一箇神は、『古語拾遺』の他、『日本書紀』、『播磨国風土記』に登場する製鉄・鍛冶の神であり、『古事記』の岩戸隠れの段で鍛冶をしていると見られる天津麻羅と同神とも考えられている。

鉄鐸の研究には、大場磐雄氏⁽¹²⁾、藤森栄一氏⁽¹³⁾らの先駆的な業績があるが、これらの研究は製作年代が不明な伝世品として残されている鉄鐸を主な対象としている。しかしながら、両先学者が論考中でギリヤークのシャーマンの事例などを挙げ、大陸ツ

ングース系民族間に行われるシャーマンの巫人が帯に付着する鈴について触れていることは注目すべきであろう。

発掘調査による考古資料に関しては、1959年の栃木県日光男体山山頂遺跡の発掘調査で多量の円錐形の鉄製品が見つかったことで、鉄鐸として認識されるようになった⁽¹⁴⁾。この遺跡では131点もの鉄鐸

が出土しており、7種類に分類されている。遺跡の年代に関しては、銭、鏡、土器類などからみて、奈良時代末～平安後期と考えられているが、佐野大和氏は、報告書の中で、「絶大なる山霊の神気に触れ、法力を得ようとする修行者達によって、盛んに、ふり鳴らされたものと考えられるのである」と鉄鐸の性格について述べている。

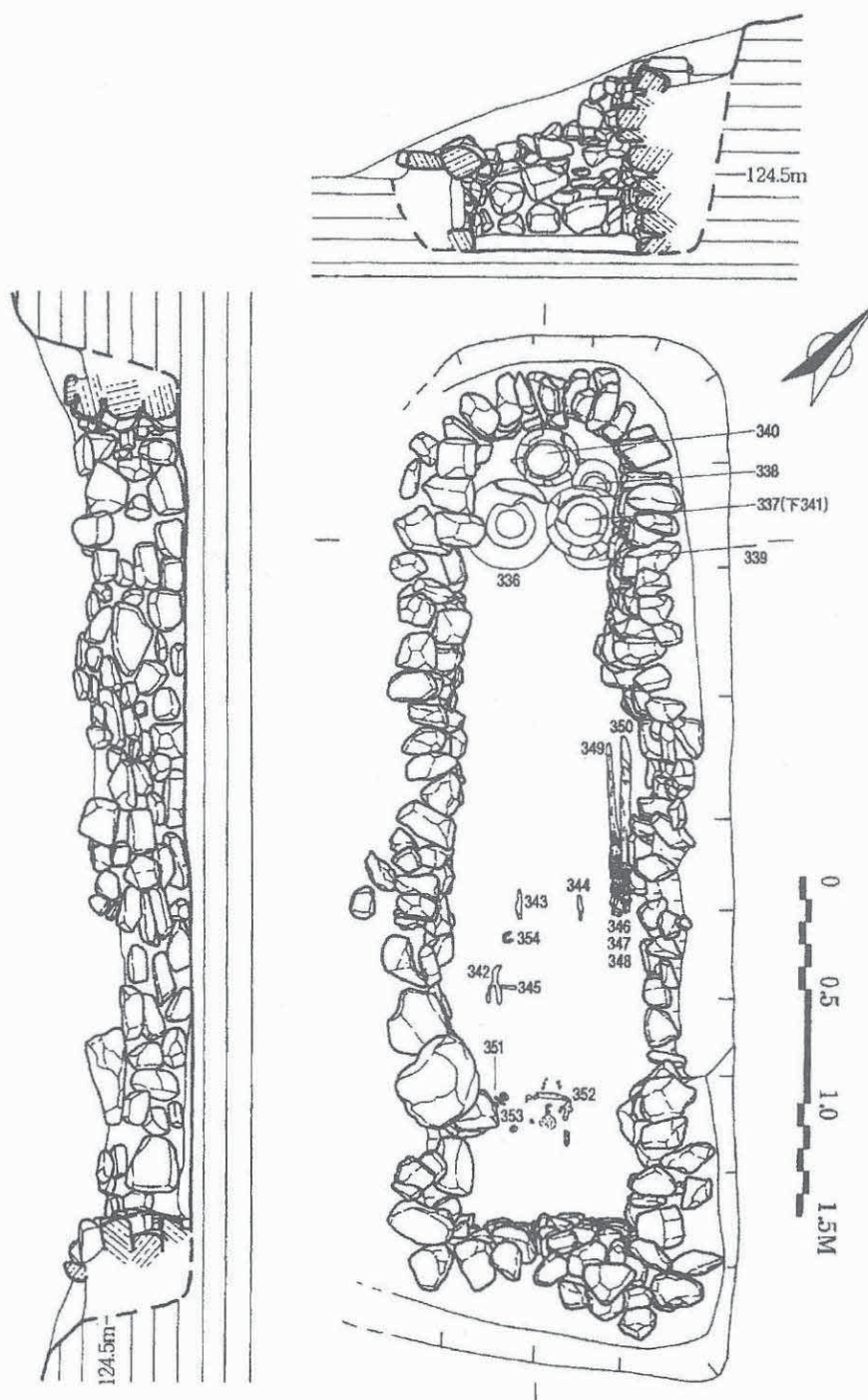


図1 蔚山・早日里古墳 49-2 号の遺物出土状態（鉄鐸：346、347、348）

以後、福岡県宗像郡沖ノ島の発掘調査⁽¹⁵⁾でも、古墳時代～9世紀の1号遺跡から40点余りの筒状品と金銅製鈴6点が、7世紀後半の5号遺跡からは鉄鐸1点の他、銅製鐸身4点、銅製舌1点が確認された。

また福岡県かつて塚古墳の横穴式石室から7点⁽¹⁶⁾、群馬県倉賀野万福寺遺跡6号墳⁽¹⁷⁾でも1点確認されたが、時期は両遺跡とも5世紀後半～6世紀前半と考えられている。(図2)

韓国と同様で、日本においても鉄鐸が管状鉄製品、円錐形鉄製品、石突状鉄製品、不明鉄器などで報告されていたが、このように鉄鐸に対する認識が乏しかったことを考えると、今後資料の再検討によっては、更なる事例の増加が期待される。

ここでは、今日までの事例を網羅した、行田裕美氏⁽¹⁸⁾と早野浩二氏⁽¹⁹⁾の優れた研究成果に頼って、日本の鉄鐸資料について整理しておきたい。

行田裕美氏は、『西吉田北遺跡』の報告書の中で鉄鐸に関する基礎的な考察を行っているが、長野県を含む日本各地の古墳時代以降の資料を集成し、韓国の事例もいくつか紹介している。

鉄鐸の形態に関しては、平均的には7.8cm～12.3cmの大きさのものが多く、鐸身は素材となる鉄

板の形状に規制され、鉄板が三角形なら円錐形、方形なら筒形の大きく2種類に分かれると分析している。また舌の形態には2つのパターンが認められるとしたが、一つは棒状のもの、もう一つは上端を折り曲げて吊り下げのような鉤形に加工したもので、後者の方が圧倒的に多いと言う。そして、鐸身の中に舌を取り付けることによって初めて鉄鐸となるとし、2つの取り付け方法が認められると説明している。まず、一つ目は、鐸身の上位に環状あるいは直線状の鉄製品を取り付け、これに舌を吊り下げるというやり方、二つ目は、舌の上端が鉤になっているもので、そこに針金を掛け、棒状のものは縛って、片方の針金を鐸身の上端の隙間に通すという方法であるが、後者が本来の鉄鐸の在り方で、吊り下げ部を持つものは後出のものとしてみている⁽²⁰⁾。

ところが、早野浩二氏の見解によると、古墳時代の鉄鐸は、基本的に鍛造製の円錐形(金東淑Aa型)で、舌に関しては、その取り付け方がごく単純な装置であることから遺存率は低く、鉄鐸を認識する際に、舌の有無は第一義的な判断材料とはならないとした。また複数で出土する場合は、形状や大きさ、製作方法が類似することから、複数が一連の製品として製作されたであろうとみている。

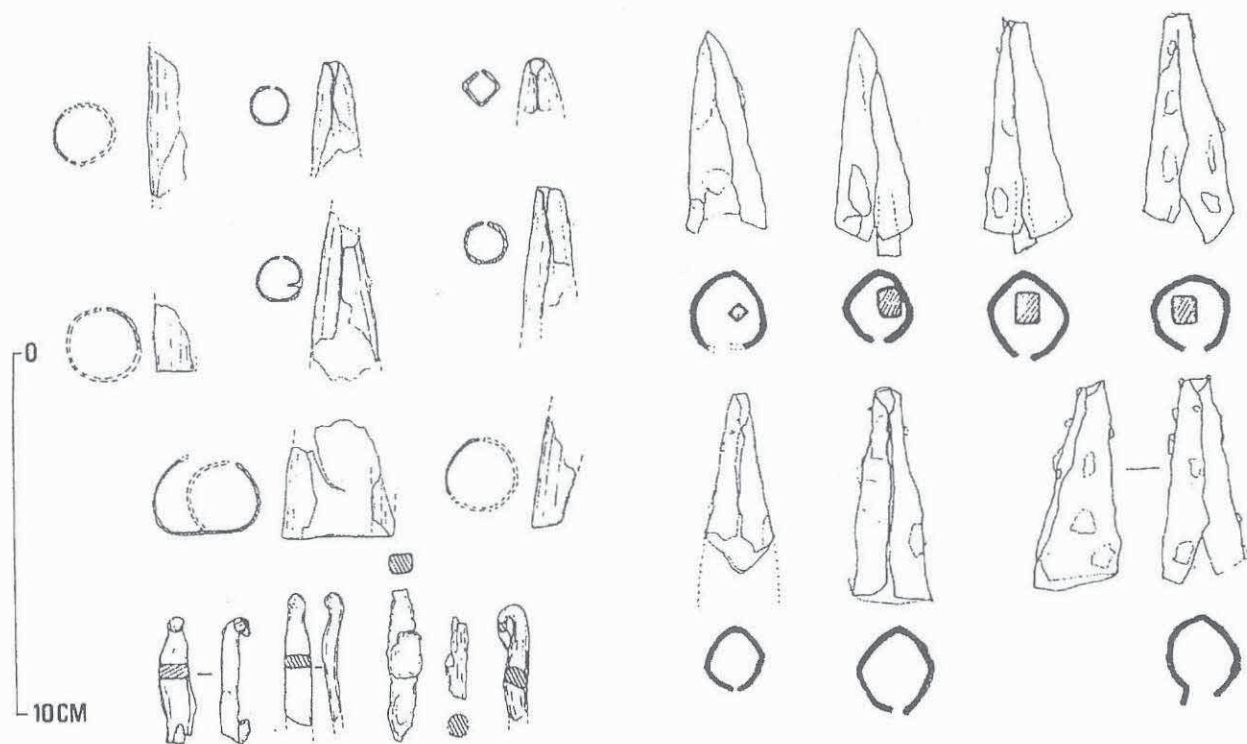


図2 日本出土鉄鐸の事例(左:忍坂3号墳8点、右:かつて塚古墳7点)

鉄鐸の確実な最古の例は、岡山県西吉田北1号墳出土の2点で⁽²¹⁾、時期は出土土器の編年から5世

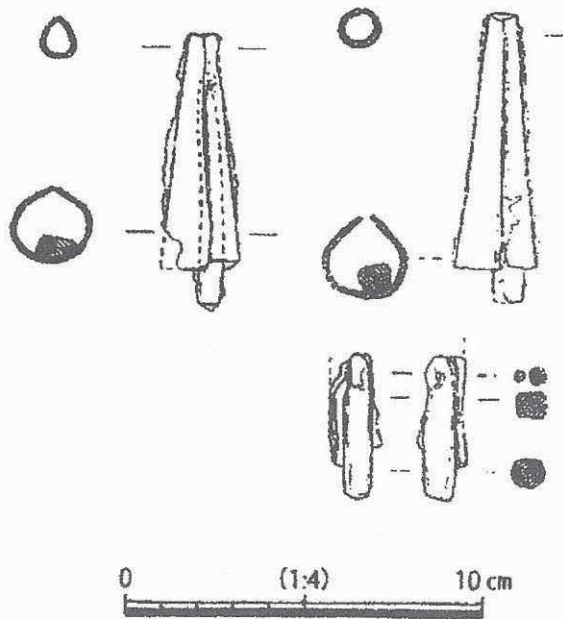


図3 西吉田北1号墳出土鉄鐸

紀中頃に近い後半と考えられている。尚、西吉田北1号墳では鉄鉗、鑿が出土しており、これら鍛冶具は韓半島からの搬入品と考えられている⁽²²⁾。西吉田北1号墳は、箱式石棺を持つ小規模墳で鍛冶具が主要な副葬品となっているが、鉄鐸も鍛冶具と共に持ち込まれた可能性が考えられる。(図3)

西吉田北1号墳の他にも、福岡県カクチガ浦3号墳から鉄鐸1点と鉄鉗が、また同6号墳の周溝において陶質土器、鉄鐸が共伴出土しているが、このような様相は、5世紀代(後半)における鉄鐸の出現と渡来人の関連性を窺わせる。

従来の研究でも、鉄鐸の副葬の背景について渡来系の鍛冶工人と関連性を想定している見解が多い。村上恭通氏⁽²³⁾は、古墳出土の鍛冶具に共伴する渡来系遺物は、近畿地域では雛型鉄器(小型鉄製農工具)、中国・九州地域では鉄鐸、馬形帶鉤、鑄造梯形斧と明らかに種類が異なっており、地域差があると指摘している。

ところで、愛知県豊田市指定史跡の神明遺跡⁽²⁴⁾では、これまで弥生時代後期から古墳時代を中心に営まれた数多くの住居跡や、三味線塚古墳などが調査された。遺跡内の段丘端部に立地する三味線塚古墳⁽²⁵⁾は、5世紀中頃にこの周辺一帯を治めた首

長の墓であると考えられているが、主体部は粘土槨で、周溝からは初期須恵器や石製模造品、U字形刃先、鉄鉋と共に、円錐形鉄製品1点が出土した。また5世紀後半の神明集落遺跡・SX201祭祀遺構では、円錐形鉄製品2点、鉄鋸、鉄鋌、鉄滓と共に、石製模造品の有孔円板、白玉、ガラス玉、土師器、須恵器、炭化桃核が検出されている。

神明遺跡出土の3点の円錐形鉄製品を、早野浩二氏は⁽²⁶⁾ いずれも小型で頂部が貫通しないことから、非実用品としながらも鉄鐸と認定している。しかしこのような小型で舌を伴わない場合は、その認定が非常に困難で、小型鉄製農工具のような鉄鐸形鉄製模造品の可能性も考えられるのではなかろうか。

また、早野浩二氏は、6世紀後半の愛知県春日井市高蔵寺5号墳⁽²⁷⁾の円錐形鉄製品1点と田原市藤原1号墳⁽²⁸⁾の石突1点に関しても鉄鐸と分析している⁽²⁹⁾。そして高蔵寺5号墳で砥石(提砥)が共伴出土していること、近隣の春日井市廻間7号墳の韃羽口、田原市藤原2号墳の鉄塊、田原市栄蔵古墳群出土の鉄製馬形などの出土遺物から、祭祀具として鉄鐸が副葬、所持される背景に鉄器製作との一定の相関が認められると解釈した。

豊田市高橋地区にある神明社古墳は渡来系の竪穴式石室を持つ6世紀初頭の古墳であるが、山ノ神古墳からは三累環頭太刀が出土しており、鉄器製作に関してはこのような渡来系出土遺物から想定できる全体的な動向も視野に入れて考えていかなければならないであろう。

以上、簡約に日本における鉄鐸資料とその研究傾向についてまとめてみたが、鉄鐸は5世紀代に出現し、7世紀に至るまで古墳時代の全期を通じてみられるようである。しかし9世紀末～10世紀代に長野県を中心に突然現れる鉄鐸に関しては、古墳時代から平安時代初頭の墳墓や祭祀遺跡での事例とはその様相が異なっており、住居から出土する事例が多い。

また錫杖状鉄製品⁽³⁰⁾の出現などにも表れているように、北東北においても、独自の鉄鐸文化を形成していたようである⁽³¹⁾。錫杖状鉄製品は、環状部に舌を持たない鉄鐸(筒形鉄製品)の他、鉄製の棒や小板を下げる例もあり、これらがぶつかり合って音を発生させる道具と考えられている。8世紀～11

世紀の住居跡や墳墓から出土しており、東北独特の遺物である。伝来品である鉄鐸は小野神社「神代鉾」、矢彦神社の「麻鉾」のように、また古くは諏訪大社のものも、鉾につけられていたと考えられているが、錫杖状鉄製品も、祭祀具として、鉄鐸と共に今後検討が必要とされる非常に興味深い遺物である。

4. おわりに—鉄製儀器の歴史的背景

以上、韓国と日本における鉄鐸に関する研究傾向を簡略に整理してみた。共通する問題点及び課題としては、不明鉄器などで報告されている資料を見なおす作業であろう。今後資料の増加を待って、祭祀遺跡、生活遺跡から出土した事例と墳墓出土のものとの比較検討も必要とされる。

何より鉄鐸の出現時期における解明が大きな課題として残されているが、出土遺物の中で、特に製作段階から意識された祭祀儀礼専門の器物（儀器）の出現は非常に重要であり、従来とは異なった葬送及び祭祀儀礼の発展を窺知することができる。

鉄製儀器には、鉄鐸の他にも、儀器性鉄矛、小型鉄製農工具⁽³²⁾、そして韓半島特有のものとしては有刺儀器⁽³³⁾などが挙げられる。このような儀器の出現から想定できる祭祀・儀礼の発展は、祭祀そのものの総体的変遷をも意味するところであり、儀器の象徴性からは古代社会の歴史的な背景、文化・理念的な側面まで窺い知ることができるであろう。

『三国志』魏志東夷伝弁辰条には「国から鉄を産出する。韓・濊・倭がみな鉄を取っている。どの市場の売買でもみな鉄を用いていて、中国で錢を用いているのと同じである。そしてまた（楽浪・帯方）二郡にも供給している。」という記事がみられ⁽³⁴⁾、韓半島の東南部における鉄生産を窺わせるが、この記事に見られる国は弁韓地域である可能性が高いと考えられていて、金海の狗邪国がもっとも有力な候補である。また狗邪国の別名、「金官国」⁽³⁵⁾の金は鉄を意味し、『日本書紀』のこの地域をいう「須那羅」、「素奈羅」の表記も「쇠나라」（鉄の国）と解釈できる⁽³⁶⁾。

有刺儀器をはじめ、釜山・徳川洞C地区13号、機張清江里11号出土の鉄鐸など、この地域における豊富な鉄の生産を裏付ける考古資料は多いが、その中でも特に大成洞古墳群の出土遺物は注目すべきである。この古墳群は1～5世紀にかけて築造され

た金海地域の支配層の墓域として考えられているが、1993年の発掘調査で確認された2世紀前半の12号の木棺墓からは、頭に鉄帯を付けた人骨が検出されており、金銅冠の源流を窺わせる貴重な資料を提供している。

そして4世紀代の木槨墓である2号墳と13号墳からは、巴形銅器、筒形銅器、碧玉製玉杖、碧玉製石鏃など当時の日本列島との交流関係を表す倭系の遺物が出土したが、このような遺物から金海地方では鉄生産を基盤に活発な交易活動が行なわれていたことがわかる。また多大浦、東萊は『三国史記』の居柒国、『日本書紀』多多羅に比定される地域で、踏鞴（たたら）が日本語で製鉄技術関連用語であることから鉄生産の可能性が裏付けられる⁽³⁷⁾。

慶州・皇南洞106-3番地4号、隍城洞32号、新院里2号でも鉄鐸が出土したが、慶州を中心としていた斯盧国は、『三国遺事』巻1にみられる昔氏の始祖脱解が冶匠であるとの伝説からも、鉄生産を基盤に新羅へと成長していったことがわかる。

『三国史記』巻38～39職官上・中によると、新羅では鉄鑪典という官司を別において専門的に金属の鍛錬と金属器具の製作を行なっていたが、また工匠府を別に設置し、金属工芸の技術群を管掌したと記述されている。このような鉄生産を裏付ける考古資料として慶州市隍城洞遺跡が挙げられるが、製鉄炉、溶解炉、精錬・鍛錬鍛冶炉などの遺構が見つかり、4～5世紀において製鉄が一貫体制で行なわれたことを示している。

高霊・池山洞2号、池山洞26号の鉄鐸出土例がある大伽耶⁽³⁸⁾の場合、現在の行政区域上陝川郡に属する「冶爐」という地方が本来高霊地域であって、その地名から窺われるように鉄の生産と関連がある⁽³⁹⁾。『世宗実録』地理志陝川郡条「沙鉄産冶爐縣、南心妙里有鉄場、歳貢正鉄九千五百斤」の記述からもこのような事実は確認できる。

有刺儀器の出土例は少ないが、それは小型鉄製模造農工具という儀器が主要埋納品であったためで、このような主要儀器の相違は、地域色を表すと共に根底にある思想的な觀念の違いに起因すると思われる。

陝川地域は玉田古墳群の付近には多羅里という地名が遺存しており、『日本書紀』にみえる多羅国⁽⁴⁰⁾の中心地であった可能性が高い。

鉄鐸は陝川・倉里 B-26 号、同 B-35 号、同 B-74 号、芋浦 E 地区 5-1 号から出土している。玉田地域は高霊式土器の出土など大伽耶との親近性から、大伽耶連盟体の一員として重要な小国であったと見るのが定説的であるが⁽⁴¹⁾、鳥文有刺儀器に見られるように、儀器性鉄器においては咸安地域とより密接な関連性が考えられる。

趙榮濟氏は玉田古墳群から出土した金属遺物の量が大伽耶の池山洞古墳に比べて異常に多いことから玉田地域には大伽耶に鉄及び鉄製品を供給する集団が存在していたと解釈した⁽⁴²⁾。鳥文有刺儀器は有刺儀器として分類されているが、素材・形態的な面からみて、基本的に他の有刺儀器とは異なる性格をもつ儀器であることがわかる。鳥の装飾から死者を送るために葬送儀礼に使われたと推測できるが、大伽耶連盟の一員であった多羅国は豊富な鉄器生産を経済の基盤にしていたために、その支配者は高度の鍛造技術が要求される装飾性の強い有刺儀器を通じて権力をアピールしたとも考えられる。

以上のように、鉄製儀器によって設定される地域圏は文献記事に見られる金官国、居柒国、大伽耶、多羅国、斯盧国（新羅）の鉄及び鉄器生産とほぼ一致することがわかる。またその地域色の表れは、鉄生産を担っていた集団が地域ごとに異なることを示すと同時に、彼らの自己主張のシンボルとして鉄製儀器が使われたことを意味する。特に韓半島の独自のものである有刺儀器は、鉄鋌がもつ象徴的な概念の極大化された形であることから考えると、有刺儀器による地域圏の設定は新羅と加耶諸国における鉄生産の実態を直接に反映していると言っても過言ではない。

日本における鉄鐸、小型鉄製農工具などの鉄製の儀器に関しても、鉄器生産を巡る韓半島と交流関係を念頭におきながら、日本列島内でどのような歴史的・地域的な展開を遂げたかを考えていかなければならないであろう。

註

- (1) 二里頭遺跡は、中華人民共和国河南省偃師市の二里頭村で発見された、新石器時代末期から青銅器時代にかけての都市・宮殿遺跡である。1959 年に発見されて以来、

発掘や研究が進められているが、1960 年には規模の大きな宮殿の基壇が発見されており、中国初期王朝時代に属する最古の宮殿建築とされている。

- (2) 中国東北地方やロシア沿海地方、サハリンではシャーマンが鉄鐸の多数ついた、踊りながら音を発する服を着用していたが、ロシア沿海地方では、日本海に面したモノストリカIII遺跡（7～8 世紀）から、衣服につけられていたと思われる小型の鉄鐸が多数出土している。またアムール河流域の 10 世紀頃の墳墓からは、環状の鉄製品に鉄鐸や鉄棒、鉄小板を下げた資料が出土している。（小嶋芳孝、2001、『広報あおもり』）
- (3) 長野県諏訪大社上社：3 組（各 6 点）、同塩尻市の小野神社：11 点、同上伊那郡辰野町の矢彦神社：1 点
- (4) 釜山大学校博物館、1987、『陝川 芋浦 E 地区遺跡』、釜山大学校博物館遺跡調査報告 第 11 輯
- (5) 慶北大学校博物館・慶南大学校博物館、1991、『慶州新院里古墳群発掘調査報告書』
- (6) 洪潜植、1995、「古墳文化を通じてみた 6～7 世紀代の社会変化—嶺南地域を中心に—」『韓国古代史論叢』7、韓国古代史研究所、駕洛国史蹟開発研究院
- (7) 金在浩、2001、「新羅中古期の村落の成立と地方社会構造」ソウル大学校大学院文学博士学位論文
- (8) 金東淑、2000、「嶺南地方の 6～7 世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究」『慶北大学校考古人類学科 20 周年記念論叢』慶北大学校人文大学考古学科
- (9) 国立昌原文化財研究所、2000、『蔚山早日里古墳群発掘調査報告書』
- (10) 国立全州博物館、1994、『扶安竹幕洞祭祀遺跡』、国立全州博物館学術調査報告 第 1 輯
- (11) 嶺南埋蔵文化財研究院、1999、『大邱 時至地区生活遺跡 I』、嶺南埋蔵文化財研究院学術調査報告 第 15 冊
- (12) 大場磐雄、1972、「続鉄鐸考」『信濃』第 24 巻第 4 号 同、1975、『考古学上から見た古氏族の研究』、永井出版企画
- (13) 藤森栄一、1974、『銅鐸』、学生社 同、1968、『藤森栄一全集』第 14 巻、学生社
- (14) 佐野大和、1963、「鉄鐸」『日光男体山—山頂遺跡発掘調査報告書—』角川書店
- (15) 宗像大社祭祀遺跡調査隊編『沖ノ島 II』昭和 45 年度調査概報、『宗像沖ノ島』昭和 54 年、宗像大社復興期成会）
- (16) 「福岡県かつて塚古墳調査報告」『考古学雑誌』第 52 巻第 3 号、1967、日本考古学協会
- (17) 大和久震平、1983、「小形鉄鐸について」『倉賀野万福寺遺跡』高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会
- (18) 行田裕美、1997、「鉄鐸について」『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 58 集、津山市教育委員会、p101～108
- (19) 早野浩二、2008、「古墳時代の鉄鐸について」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 9 号、p31～42
- (20) 行田裕美氏は、伝世鉄鐸資料も研究対象にしているが、伝世品の全てが前者のタイプとした。また倉賀野万福寺遺跡、カクチガ浦 6 号墳、韓国の陝川倉里古墳群 B 第 26 号墳出土のものを後者の事例として挙げている。

- (21) 註 18 の文献
- (22) 大澤正巳、1997、『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 58 集、津山市教育委員会
- (23) 村上恭通、2007、『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- (24) 『神明遺跡 2』、2001、豊田市埋蔵文化財調査報告書第 17 集、豊田市教育委員会
- (25) 『三味線塚古墳』、2001、豊田市埋蔵文化財調査報告書第 18 集、豊田市教育委員会
- (26) 註 19 の文献
- (27) 『高蔵寺 5 号墳』、1974、『春日井市遺跡発掘調査報告』第 6 集、春日井市教育委員会
- (28) 『藤原古墳群』、1988、渥美町埋蔵文化財調査報告書 5 渥美町教育委員会
- (29) 高蔵寺 5 号墳：身部の長さ 6.0 cm、円錐形で舌は遺存しない³⁾、頂部に懸垂穴あり。
藤原 1 号墳：身部の長さ 3.6 cm、舌は遺存しない。
両古墳とも時期は 6 世紀後半で、横穴式石室
- (30) 詳細については、以下のような研究がある。
小嶋芳孝、2004、「錫杖状鉄製品と蝦夷の宗教」『宇田川洋先生華甲記念論文集—アイヌ文化の成立—』
井上雅孝、2002、「錫杖状鉄製品の研究—北東北における古代祭祀具の一形態—」『岩手考古学』第 14 号
- (31) 小嶋芳孝氏は、北東北で出土する錫杖状鉄製品と舌を持たない鉄鐸（筒形鉄製品）や鉄製鈴を東北アジアに広がるシャーマニズムに関連した器具と位置づけている。またこれらの遺物は、10 世紀以降の中国東北地方からロシア沿海地方に居住していた女真と蝦夷の交流を裏付ける有力な資料ではないかとする³⁾、このような見解は、日本列島における文化の輸入ルートを考える際に、非常に興味深い点を示唆している。
- (32) 長さが数センチという小型の鉄製農工具は、小形鉄製模型農工具、ミニチュア農工具、鉄製雛形農工具あるいは縮小模型農工具・鉄製明器などと呼ばれてきた。韓半島では、三国時代の大伽耶と中心とする加耶地域の一部と百済の錦江流域、そして榮山江流域に集中的にあられる特徴的な遺物である。
日本では、古墳時代の全期にかけて出土しており、奈良とその周辺地域、北九州などにおける前方後円墳、円墳と群集墳へと拡散する様相が確認されている。
近年、白石太一郎氏、門田誠一氏、坂靖氏によって、韓半島の伽耶地域からの影響と渡来系工人との関連を考慮すべきであるという提言がなされている。
- (33) 有刺儀器は、鉄鋌または鉄板の横の部分を取り取って、多様な刺の形を施した鉄器のことで、百済・高句麗地域、そして日本列島などでは現在までその出土例がなく、新羅・伽耶地域の古墳からのみ出土する遺物である。（高慶秀、2002、「韓半島における鉄製儀器に関する考察」『祭祀考古学』第 3 号、祭祀考古学会）
- (34) 『三国志』魏志東夷伝弁辰条「国出鉄、韓 倭皆從取之、諸市買皆用鉄、如中国用錢、又以供給二郡」
- (35) 『三国史記』地理志、『三国遺事』五伽耶—『本朝史略』
- (36) 李永植「伽耶と鉄」『市民のための伽耶史』釜山・慶南歴史研究所編、1996、p65
- (37) 李賢恵「鉄器普及と政治権力の成長」『伽耶諸国の鉄』仁済大学校加耶文化研究所編、1995、p19
- (38) 大伽耶の表記は『三国史記』地理志、『三国遺事』五伽耶—『駕洛国記』に見られ、現在の慶尚北道高靈がその比定地である。
- (39) 李炯基「大伽耶の聯盟構造に関する試論」『韓国古代史研究』18、2000、p22
- (40) 『日本書紀』神功紀 49 年（多羅の表記は『梁職貢図』百済使でも見られる）
- (41) 李熙濬「土器からみた大伽耶の圏域とその変遷」『伽耶史研究』、1995
- (42) また 4 ～ 6 世紀前半にかけて多くの遺構から玉が出土しており、鉄器・玉を生産する工人集団の存在の可能性は極めて高い。